

北京に滞在中の教え子からの便りによれば、冬の長かった北京も四月に入ると一挙に春色となり、迎春花、桃、杏花が満開で、柳も一斉に芽吹きはじめているという。

◆ —  
そのような北京はいま、『毛沢東選集』第五巻の発刊を祝ってにぎやかであろう。

華国鋒政権の劇的な出現以来、ちょうど半年になったが、華国鋒政権は、依然として党中央委員会さえ開催することができず、したがって

## ●外交時評 北京のよどんだ政治的気流

中嶋領雄 (東京外語大学教授)



組織的・制度的にはまだ認知されていないのに、華国鋒新主席が就任早々に予告した『毛沢東選集』第五巻の発行はそれとおりにおこなわれたのである。

もっとも、「毛沢東思想」の継承者をもって任ずる華国鋒主席としては、このようにして「毛沢東思想」重視の姿勢を示し、同時にその解釈権を握ろうとするものであろうし、『毛沢東選集』第五巻の発行それ自体は、すでに久しい以前からの懸案であり、今回は建国直前から一九五七年秋の「大躍進」政策直前までという、

内政的にはもともと無難な時期を対象とするものであるだけに、『毛沢東選集』第五巻の発行をもって、華国鋒体制の安定性を語るには、いささか材料不足だといわねばなるまい。

中国の民衆も幹部も、だれしものが注視していた今年の清明節は、天安門前広場の人民英雄記念碑に一輪の花輪も献ぜられることなく終わったのである。

今年の清明節が天安門事件一周年である以上に、毛沢東亡きあと最初の清明節であることを

考えると、このような事実は、党中央が強引に規制した結果であることが歴然とする。そして、これまでにも幾度か公式・非公式に語られてきた鄧小平氏の再復活は、依然としてその実現を見ないまま今日に至っている。

そのような時、すでに二月二十一日の政治局会議で、葉剣英党中央軍事委員会副主席が鄧小平の復位を要求したけれども結論が出なかった (AFP 二月六日北京発) とか、鄧小平を復活させなければ軍は華国鋒政権を支持しなくなる、と同じく葉剣英氏が発言した (ポーランド

大使館筋) とかの情報もあるが、いずれにせよ、鄧小平問題ははまだ決着がつかっていないものである。

それは、例えば昨年四月七日の華国鋒の党第一副主席兼國務院総理就任決議と同じ日の鄧小平解任決議と同様に、「毛主席の提案に基づいて」おこなわれているように、華国鋒の台頭と鄧小平の転落とがまさに正と反の関係にあるからであり、鄧小平の再復活は華国鋒の地位を脅かさずにはおかないからにほかならない。

◆ —  
そうした状況のなかで、最近目立つのは、呉徳、陳錫聯、汪東興、倪志福ら北京政変に関連した華国鋒体制の指導的人物の政治的後退であり、半面、旧実権派幹部の復活が相次いでいることである。

◆ —  
二月中旬の陳不顯元上海市党委第一書記の復活 (雲南省革命委副主席) は、彼がかつて北京の彭真と並び、上海を牛耳る実権派の領袖であっただけにきわめて象徴的な事実であった。このような現実には、文化大革命の否定を意味するのではなからうか。

◆ —  
華国鋒体制下の北京には、陽春の訪れにもかかわらず、依然として不透明で、よどんだ政治的気流が漂っている。

政治の気候は、まだ「雷鳴すれども雨降らず」の「早春の天気」の段階であるといわねばならない。